

## 第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」記録 オンライン講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

### はじめに

今日は、第11回企画展記念オンライン講演会の2回目です。3月に第1回目として渡辺賢二先生に、この資料館のできるに至った経緯、特に市民運動や、高校生たちとの関わり、それから登研会の皆さんとの関係について詳しくお話いただきました〔渡辺賢二「講演会 登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」『明治大学平和教育登戸研究所資料館館報』第7号所収〕。今日は、私、山田が、資料館開館にむけての明治大学の取り組みについてお話いたします。明治大学の取り組みといっても、市民運動があり、そして明治大学の取り組みがありましたので、それを順番にご説明します。

明治大学の平和教育登戸研究所資料館が開館したのは、今から11年前、2010年3月29日です。今日は、1番目に、その開館に至る大学内での混乱、紆余曲折と、その間になされた、どのような資料館を作るのかという議論についてご紹介します。

2番目には、やはり大学だけで作ったのではないこと、つまり、川崎市の行政があり、市民運動があり、そして遺跡の所有者としての明治大学、それに加えて、遺跡の関係者・登研会〔資料館註・元登戸研究所勤務員有志で結成された親睦団体〕など登戸研究所に勤めていらっしゃった方々の四者が連携し、戦争遺跡の保存・活用を模索した結果、この資料館があるのだということをお話します。

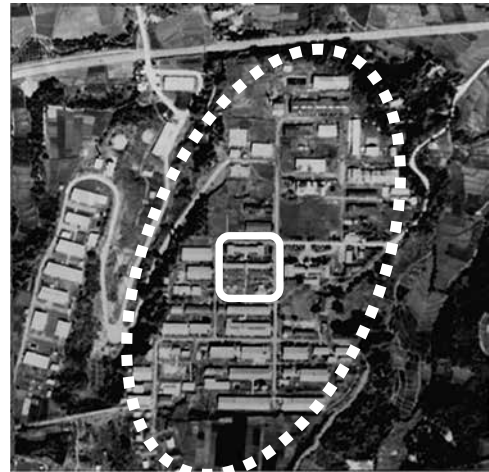
### 1 明治大学による用地・建物の取得

現在の生田キャンパスは第1図左のようなものですが、かつて終戦直後の登戸研究所は第1図右のような感じでした。第1図右点線枠内が現在の明治大学のキャンパスになっています。中央校舎が今ある場所はこの辺り〔第1図右四角枠内〕です。この付近に、登戸研究所の本部・本館があり、その前にヒマラヤ杉。これは航空写真にも写っています。戦後も登戸研

究所の建物はほとんど残っていましたが〔第2図〕。例えば、こちらの方は、現在西三田団地や生田中学校になっているところですが、この〔第2図点線〕辺りを境に、明治大学です。ここ〔第2図矢印先〕に写っているのが現在の資料館です。

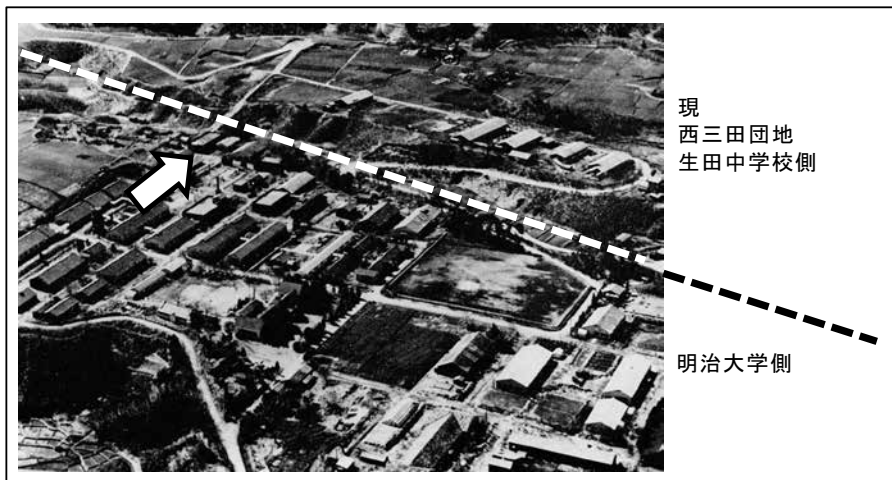
このように、戦後も登戸研究所の建物というのは、そっくりそのまま残っていました。これは1960年代に撮られたキャンパス内の写真です〔第3図〕。ここに写っている建物は、全て

登戸研究所時代に建てられたものでした。現在すべての建物が老朽化のために取り壊されて新しい建物になっていますけれども、面影があるのは、ここにあるヒマラヤ杉です〔第3図点線内〕。ですから、これは南の方から北に向けて撮っていますが、その前にある建物というのは、登戸研究所の本部・本館だった建物で、戦後は明治大学の図書館として使われていました。ここに写っている建物は全てが木造平屋建てです。これは登戸研究所時代の建物の一つの特徴です。コンクリート造りの建物も7棟ばかりありました。



1947年 GHQ撮影 航空写真  
(国土地理院所蔵、資料館加筆)

第1図 現在の生田キャンパス(左)、終戦後の登戸研究所(右)



第2図 1954年に撮影された生田キャンパスの木造建物群  
(明治大学所蔵、撮影者不詳、資料館加筆)



第3図 1960年代生田キャンパスの木造建物群  
(吉崎一郎氏撮影、資料館加筆)

その内一つが現在の資料館になっている建物です。

これは今、少し説明した、明治大学では図書館として使われていた建物ですけど〔第4図〕、後ろにヒマラヤ杉が見えます。元々この建物は、日本高等拓植学校時代の学校の本部で、それがのちに、登戸研究所の本部・本館となりました。ですから、この建物は、拓植学校、登戸研究所、それからその次に慶應義塾大学、そしてさらに明治大学というように、ずっと使われ続けてきたということになります。

明治大学が、この用地を取得したのは1950年です。終戦からそれまでの間は、この土地は



第4図 1966年に撮影された図書館 日本高等拓植学校の本部、のちに登戸研究所本部本館として使用された建物  
(吉崎一郎氏撮影)

慶應義塾大学、あるいは北里研究所、巴川製紙などが利用していました。元々陸軍の施設があったところなので国有地でした。そこを借用する形で、こういう学校や機関がしばらく使っていました。そしてその国有地を、明治大学が払い下げてもらったのが1950年。そして1951年度より、農学部のキャンパスとして使用が始まりました。元々、明治大学は農学部のキャンパスを探していました。戦争中に、農学部の前身である農業専門学校というものがあつたのですけれど、それは千葉県ほんだの誉田というところにありました。それを、現在の生田の地に移して、本格的な農業研究、新制大学になってからは、農業専門学校が農学部となって、この農学部の新しいキャンパスとして、生田が使われるようになりました。当初、明治大学が取得した土地には、建物が89棟、そして土地はおよそ3万坪ありました。現在、明治大学生田キャンパスは5万坪ぐらいありますので、その後少しずつ、買い足していったということです。

1970年代になりますと、キャンパス整備のために、古い登戸研究所時代の建物が次々と取り壊されていきます。そして1990年代半ばには、元々、登戸研究所の第三科、偽札関係の建物だった5号棟、26号棟といった木造の建物2棟、それから第二科、毒物・薬物などをやっていた36号棟、44号棟という鉄筋の建物が2棟。そして弥心神社、動物慰霊碑、消火栓、それから弾薬庫といわれる倉庫、これらを残すのみとなりました。現在では、登戸研究所時代の建物は、明治大学時代から36号棟と呼ばれる、現在の資料館のみとなっています。

## 2 登戸研究所に関する調査・研究

登戸研究所に関する調査・研究というのは、例えば、戦後にジャーナリストによる調査や、登戸研究所に勤めていた旧軍人の方による回想や証言というものが、主に1980年代になると行われます。これは第11回企画展のパネルをご覧になると分かるかと思いますが、米軍による占領が終わると、関係者も少しずつ証言するようになります。最初は風船爆弾を中心にした証言が出ました。そして偽札の証言。そして最後に、第二科です。第二科に対する証言が遅くなったのは、やはり戦争中に人体実験という、非常に暗い歴史があったからだと考えられます。しかし80年代になると、元所員たちも集うようになりまして、彼らの中で「登研会」という組織、親睦団体を結成します。それが1982年のことです。

それと前後して、川崎の市民や高校の先生、あるいは登戸研究所が敗戦直前に移転した長野県の伊那の人たちによる調査が始まります。ここで非常に重要なのは、1989年という年です。この年は平成元年です。昭和が終わって、平成に変わった年に、こういう市民運動や高校生たちの調査の結果、元所員である伴繁雄さんたちの証言がここで引き出されます。それから、川崎では第二科の元タイピストの方が所持していた書類の綴り『雑書綴』が発見されて、ここから登戸研究所の実態研究、調査というのは飛躍的に進歩していくわけです。

こうした中での市民と大学関係者との連携ということですが、端的にいうと明治大学の中にある建物の取り壊しをめぐる、大学と市民との間でいろいろ話し合いが行われるという流れになります。1994年に、明治大学は登戸研究所の建物であった第三科が使っていた偽札の倉庫と思われる26号棟という建物の取り壊しを決定します。それに対して、明治大学の中でも、学生や教職員の有志が「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成して、その共同代表に文学部の海野福寿教授、それから経営学部の森恒夫教授が就任しました。これは保存運動中では大きな事件で、それまで行政、市民、それから登研会という形で進んでいた保存運動が、学内、大学の中からも、発信されるようになったということです。この海野先生や森先生たちは早速、95年に明治大学内において調査研究を本格的にやろうと大学から研究費をもらって、調査研究チームを結成します。「旧陸軍登戸研究所の総合的研究：十五年戦争におけるその意義」というテーマで3年にわたって研究を行います。

【資料1】〔本稿p.49〕が、3年間にわたる研究成果の主なものです。元々、登戸研究所時代にあったものがどんどんなくなっていくので記録を残しました。

〔1〕登戸研究所が敗戦間際に分散疎開しました。その各地に分散した建物が、まだこの頃では残っているところがありまして、そういう物の記録・保存をしました。それから、第二科が人体実験をやった南京病院、偽札を散布した上海の阪田機関本部、こういうところ取材し、スライド記録を作成しました。

- 〔2〕元所員の方の証言を基に第三科の疎開先を調査しました。偽札は最後まで生田・登戸で作ってはいましたが、福井県の武生や粟田部<sup>たけふ あわた べ</sup>などにも疎開準備をしていました。ここでは「北陸分廠」として製紙工場を接收したりしています。疎開との関連で第三科がどのようになっていったのかということを調査しています。
- 〔3〕「関西分廠」、これは兵庫県の小川村です。これを調査いたしました。
- 〔4〕元所員の証言を基に、この登戸研究所で保管されていた書籍が静岡大学工学部（浜松市）にあるとわかり、その調査をしました。「登戸研究所」という蔵書印がある書籍が約 1,000 冊発見されました。何故、静岡大学工学部に寄贈されたのかというと、これは伴繁雄さん（元第二科第一班長）の出身校だったという縁があるようです。
- 〔5〕現在第三展示室に展示している『雑書綴』です。第二科の元タイピストだった方が、非常に大切に保管されていたこの『雑書綴』を、全文コピーし製本して中を確認できるようにして、資料館になってから、誰でも閲覧できるようにしました。
- 〔6〕これらの様々な多岐にわたる研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』という本を、2003 年に青木書店から刊行いたしました。それまでに、登戸研究所に關しては関係者の回想や、ジャーナリストによる研究もありましたが、総合的な学術研究という点では、青木書店から出たこの本が最初だろうと思います。もちろんその前に、木下健蔵先生のご本（『消された秘密戦研究所』（1994 年））も出ているわけですが、そういう研究成果を踏まえて、当時の最新の研究成果を盛り込んだ物になりました。

### 3 明治大学における登戸研究所保存・活用の取り組み

90 年代の終わりから 2000 年代初めにかけて、まだ建物がいくつか残っていました。第 5 図が先程、94 年に解体することが一旦決定された 26 号棟です。これは 2007 年の撮影ですが、相当老朽化していることが分かります。最終的にこの建物は 2009 年に解体されましたが、一部の部材が保存されています。この建物は、登戸研究所の第三科、偽札を製造していたセクションで、出荷前の偽札を蓄えておく倉庫だったといわれています。



第 6 図は 5 号棟です。このアングルの写真は、随分いろんなパンフレットなどにも使

第 5 図 26 号棟（2007 年 5 月撮影）  
偽札を出荷するための倉庫（2009 年老朽化のため解体）。

われて、非常に有名になった建物ですが、偽札の印刷工場だった建物で、西洋トラス構造といい、中に柱がなくて、非常に広く使える空間ができるという構造の建物でした。中がいくつか仕切られて、印刷機が置かれていました。残念ながら資料館ができた後、この建物も、2011年2月に老朽化のため解体されています。第7図も5号棟を、北東側から撮った写真で、このように草が生えてしまっていて、中は相当痛みがひどい状態でした。この写真の右下は防火水槽で、ここからたくさん草が生えているという状態でした。実際建物の中は、ほとんどは物置のようになっていましたが一部は研究にも使っていました。実際に老朽化したとはいっても、比較的物のある、戦争中でも太平洋戦争以前、多分太平洋戦争に踏み込む以前に建てられた建物だと推定されていて、かなり丈夫な造りになっています。

第8図は弾薬庫といわれる施設で、2か所あります。資料館のすぐ裏手にもありますが、こちらは普段目に付かない農学部1号館の裏にある弾薬庫です。「○○同好会」という字が見えますけど、なんとこういうところをクラブに割り振って、学生に使わせていた時代がありました。これは現在でも残っています。

第9図は、どこの建物かと思われるかもしれませんが、現在の資料館（36号棟）です。第二科の生物兵器の研究棟で、明治大学になってから白い塗装がされていました。内部は第10図のような感じで、これは現在の第一展示室です。流しが現在でも残っていますが、実際、現役の実験室・研究施設として使われておりました。第11図のように、びっしり、いろいろな実験機材が入っていて、壁面がタイル張りになっているのがわかります。これは元々



第6図 5号棟（2007年5月撮影）



第7図 北東側から見た5号棟

5号棟は偽札が印刷された工場と推定されている（2010年撮影，2011年2月老朽化のために解体）。



第8図 農学部1号館裏の「弾薬庫」（2007年5月撮影）

タイル張りになっていたわけではなくて、明治大学が使用するようになってから、おそらくいろいろな薬品が飛んだりするという関係もあったのでしょう、タイル張りの壁面になっていました。資料館に改装する時に、このタイルの部分は取って、実際の壁面を出しています。

次に資料館を作るに至る経緯について説明します。明治大学による保存・活用方針は、正式には1998年に決定されました。94年、95年と保存を求める会ができたり、総合研究が始まったりしましたが、大学自体の動きとしては、98年に、当時の戸沢充則学長が登戸研究所跡地の保存・活用方針を打ち出します。これが大学としての最初の大きな動きといえます。この戸沢先生は文学部の考古学専攻の先生で、戦争遺跡の保存についても関心をお持ちでした。そして、この学長方針に基づき、98年の2月14日付で学長室が出した文書「旧登戸研究所の保

存・活用について」が残っています。これは大学の意思決定としては一番古いものと考えられています。この学長室の方針によると、記念碑を設置した小広場を作るということと、生田キャンパス内施設に資料室を設置するということ。しかし老朽化のため26号棟は解体、とある意味セットという形で、登戸研究所の遺跡を、何らかの形で後世に伝えていくということ、この時大学として初めて方針を打ち出しました。

そして、翌年、99年にこれが動き出します。当時の農学部長が委員長となり「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」が設置されました。何故、農学部長が委員長になるかというと、この登戸研究所関係の遺跡の多くが、農学部エリアにあったからです。この当時、既に生田キャンパスは北



第9図 36号棟：第二科生物化学兵器研究棟  
(2007年5月撮影，現在の平和教育登戸研究所資料館)



第10図 36号棟の内部  
(2007年撮影，現在の資料館第一展示室)



第11図 36号棟の内部  
(2007年5月撮影)



半分が理工学部、南半分が農学部という使い分けになっていて、その南半分に登戸研究所関係の遺跡がかなり多くありました。それから、残された建物のすべてが農学部のエリアにあったので、この検討委員会ができました。そして、コンクリート製の44号棟の取り壊しが進められましたが、それ以外の残存している建物の保存・活用を検討しました。

ここで初めて、「平和資料館」という名前が出てきます。つまり平和教育の場として先程の木造の5号棟、あるいは36号棟、現在の資料館を活用すべきだと、ようやく大学としても平和教育の場として、この登戸研究所の遺跡を保存し、活用していこうということが99年段階で明確に打ち出されるようになります。そしてこの委員会では、明治大学創立120周年にあたる2001年に展示施設をつくる、それからモニュメントをつくる、ということを決めました。この検討委員会で、結局結論に至らなかったのは、「平和資料館」にするのは5号棟なのか36号棟なのか、それとも両方なのかという争点。両方の場合どう使い分けるのかなどの点で結局結論が出せないまま、次の事態が起こってきます。しかし、ここで重要なのは、この時点で登戸研究所の遺跡を平和教育の場として活用していこうという基本方針ができたということです。ですが、その場所をどうするかということが最終的になかなか決まりませんでした。

ところが、この後事態は紛糾、2000年に明治大学の学生自治会と生協と、大学との間で、対立が非常に激化するという事件が起きます。当時は各キャンパスごとに大学祭が行われていて、大学側での学生関係の所管が学生部でした。この部署がこれら学生運動とこじれた関係になったので、大学祭の中止が決定されました。それに伴い、学生関係の所管責任者である学生部長が、何者かによって襲撃され重傷を負うという、大変な事件が勃発しました。実際そういう暴力事件が起き、当時の山田雄一学長（経営学部教授）は「学内正常化」が優先だとのことで、登戸の保存活動を一旦凍結します。

というのは、この学生運動、自治会とか生協の人たちも、非常に熱心に登戸保存運動をやっていました。「学内正常化」とは要するに、ここでいう学生自治会とか生協との関係を一旦清算するという考えです。ですから、彼らのやっている全ての運動をバックアップしないということになり、登戸保存活動というのは大学の営みとしては凍結されることになりました。

それに対して、学生教職員、学生自治会や生協なども加わっていた「保存を求める会」ですが、生田の生協が中心となり、5号棟内に、「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置して、元勤務員を講師に迎えた講演会などを開催し、大学とは別に、保存運動を継続していくことになりました。ですから、登戸保存運動が決して火種ではないものの、たまたまそれに当たっていた人たちと、全員ではありませんが、その保存運動を行っていた自治会や生田生協の人たちと、大学との関係が極めて険悪な状態になってしまったために、この保存活動は完全に凍結されることになりました。これは明治大学にとっても、非常に不幸な時代であるといえます。

それが変わったのが、2004年です。学長が変わりました。学長が変わる前に、「学内正常化」



といひましようか、大学は、それまでの学生自治会や生協と絶縁しました。そういう新しい関係になり、今度は登戸の問題を別個に考えられるようになりました。法学部出身の納谷廣美学長が2004年に就任して、登戸研究所跡地の保存活用方針というのを再度表明します。ですから戸沢学長が進めた路線を継承する形になりました。そして、非常に大事なものは、この2005年に、登戸研究所に勤めていた元勤務員の方々が作っている登研会の会長の山田愿蔵さんから、学長宛に「施設保存・資料館開設」を求める手紙が届いたことです。これは、事前に登研会の事務局長、それから渡辺賢二先生、明治大学の海野教授や森教授らが懇談して、関係者の高齢化などによって保存・活用の具体化を急ぐ必要があるということ、皆さんで確認をし、その結果、この山田愿蔵会長からの学長宛の手紙となったわけです。

それがこの手紙【資料2】、本稿p.49】です。「戦後六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。私たちは、例え、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残し、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご要請します」ということで、「1、陸軍登戸研究所当時の戦跡をできるだけ保存していただきたい」「2、陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします」。こういう手紙が学長宛に届けられました。2005年10月のことです。これが一つの大きな弾みとなって、ここに書いてあるような資料館を作っていこうという流れができあがりました。

この手紙の翌年、いよいよ具体的に明治大学では、「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」が設置されました。委員長は坂本恒夫教務部長。こういう資料館は、どちらかというとも博物館の系統ですから、本来は教務部長が担当することではないのですが、この展示資料館は平和教育を行う為の教育施設なのだという位置づけで、教務部長の管轄になりました。そして「展示資料館」は2009年度までに設置することを決定します。

ここで、この検討委員会でも議論となったのは、明治大学が設置すべきものなのかの是非、が一つです。つまり、登戸研究所というのは旧陸軍のものでありますから、別に明治大学ではなく国がやるべきことではないかと。それはもっともな話ですが、おそらくこれは国に任せておいても実現性はないということで、やはり所有者である明治大学がやるしかないのではないかと、いうところに落ち着きました。

それから、設置理念をどうするかということ。登戸研究所というのは、秘密戦のための機関ですから、人道上、あるいは国際法規上、やはりいろいろと問題もあります。それを、顕彰することではないだろう、ということです。科学技術が戦争に利用された時に、得てして歯止めがなくなってしまうことを自戒するような場として位置付けるべきではないかと。登戸研究所

の技術はこれ程高かった、という話ではなく、戦争との関係でどんどん人間性を失ってしまうということを、展示の、資料館設置の基本理念にしたらどうか、というようなことです。

実は、意外に強く議論されたのは、こういった資料館は「需要」があるのだろうか、ということです。私もこの仕事に関わっていて、どちらかというと表向きの会議の場ではないところではひそひそと、「こんなものを作っても誰も見に来ないのではないか」という話があちこちで聞かれました。凄く印象に残っているのは、「作っても、何年かすると廃墟になってしまうのではないか」というような声がささやかれていたということです。余りに特殊な資料館ですから、そんなものを作っても、誰も見に来ないのではないか。正直な話、見に来ない物を作っても結局役に立たず次第に廃れてしまうのではないかと、という見方をする雰囲気もありました。

しかし、資料館を作るという方針は決定されて、それをどんどん具体化していこうと、2007年の3月に、先程の「検討委員会」のもとに、「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）展示専門委員会」が設置されました。私が委員長になり、具体的に展示を考えていくことになりました。そして同年6月に、「展示専門委員会」は中間報告で、資料館の基本コンセプトを示しました。以下の3点です。

- ① 36号棟を展示資料館として保存し、登戸研究所の全貌を伝える歴史教育・平和教育・科学教育にふさわしい施設とすること。
- ② 登戸研究所に関する資料・文献・証言を収集すること。つまり登戸研究所がどういうものであったのかということを示すだけでなく、今後も登戸研究所に関する資料や証言を収集する、そうした調査研究機能を、この資料館に持たせるということ。
- ③ 平和教育の発信地として、明治大学における研究・教育に役立てるとともに一般に公開すること。明治大学の中の研究教育に役立てるということは勿論ですけれども、広く一般に公開して、戦争と科学技術の関係を訴える場、発信地とするということ。

こういった基本理念を作って、学内でまず同意を得なければいけないので、この6月に「展示専門委員会」は、生田キャンパスで実際にその遺跡を見る現地見学会と、こういったものを作りたいんだ、ということを説明する講演会・展示資料館説明会を開催しました。生田キャンパスは当事者ですし、実際に建物を使っている先生方もいらっしやったので詳しく説明しました。例えば36号棟を使っている先生方は、一時そこから研究機材を引き上げて、別に移さないといけません。そういう点でやはり理解を得なければならず、説明会が行われました。

そして、2008年、この年に学長選挙がありまして、異例なことです、納谷学長は「登戸研究所問題の解決」を選挙公約にしました。そして再選し、「登戸研究所問題の解決」として、基本的には登戸研究所に関する遺跡の保存活用というようなこと、同時に、残された建物、36号棟は資料館としていく、という流れに加え、他の5号棟や26号棟などの処遇も自分の代で解決するのだ、という意向を示しました。そして直ちに、「登戸研究所展示資料館（仮称）」を、

生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である 36 号棟を改装して開館するということが正式決定されて、2008 年 6 月、展示資料館（仮称）設置の学内調整ワーキンググループが作られました。これは大学の中のいろいろなセクションが共同しないとできないので、こういう物を作りました。元々は、単に博物館の分館のような形であるならば、博物館と建物を管理する施設課だけで良かったのです。しかし、平和教育の理念を実現するための機関ということで、大学の教務の中心の部署である教務事務室、建物づくりの施設課、資料館作りのノウハウを持つ博物館、新たに設置される設立準備室でワーキンググループを構成し、毎週のように会議を開いて、「ここまでできた」「もっとこれをやらなきゃだめだ」ということを、お互いに確認をする作業が行われていきます。

そして、同年 7 月、登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置準備室が、駿河台の研究棟に設置されました。基本的に展示の内容については、この準備室がアイデアを出すことになりました。資料館にする 36 号棟の改装は施設課が担当し、展示企画は準備室が行い、展示施工は博物館展示の専門業者の乃村工藝社にお願いをして、こうした連携のもとにやっていくわけです。準備室は【資料 3】[本稿 pp.49-50] のような陣容でした。準備室長を私がやりまして、展示の総監督といいましょうか、別に総監督という名前が付いていたわけではないですが、渡辺賢二先生に全体を監督していただきました。そしてその補佐が、渡辺先生の教え子で、当時兼任講師だった齋藤一晴さん。齋藤さんは高校時代に渡辺先生の下で登戸の調査もやった経験があり、大学院から私のゼミに参加をした人でしたので、渡辺先生を補佐する形で齋藤さんにやってもらうことになりました。そして準備室の学芸員として、都合 4 名の方をお願いし、この方々には準備室の事務的なことや資料の管理を担当していただきました。

そして、展示制作の担当責任者をそれぞれ割り振りました。レストスペースは、今入るとすぐにモニターなどが置いてある場所で、時代背景を説明する場所です。実はこれ、当初、案にはありませんでした。しかし、施設課の方から、いきなり秘密戦のことを説明するといっても分かり難いだろうから、時代背景を説明する場所がいるのではないかという提案がありました。もっともなことなので、そこでは明治大学の写真を使ったり、川崎の写真を使ったりして時代背景を説明するという場所を作って、学芸員の森麻弥さんに担当していただきました。

資料館に、全部で五つ展示室があるのは 36 号棟の元の部屋割りを生かしたものです。登戸研究所時代の間取りに復元をしました。実は明治大学は、ひとつの部屋に間仕切りを置いて、ふたつに分けて使っていたのですが、間仕切りは全部取り払い、元々の登戸研究所時代の部屋を再現して、5つの展示室にしました。

第一展示室では登戸研究所の全容、歴史についてです。ここは山本智之講師にお願いをしました。第二展示室、これは風船爆弾を中心とした第一科です。担当は小山亮さん。当時博士課程後期の大学院生でした。第三展示室が吉葉愛さん。第二科です。毒物・薬物。第四展示室が

偽札関係、第三科です。担当は酒井晃さん。そして第五展示室、大戦末期と戦後が本庄十喜さん。こういう方に担当していただいて、その他、当時、私のゼミの大学院生だった方々にも参加していただきました。こういうチームの下に展示の案を作り、そして具体的にどのようにパネルを作るかというのは、プロの乃村工藝社にお任せをしました。仮に作ってディスカッションをし、また改善する、ということをやりました。これが結構大変で時間もかかりました。

少し前に戻りますが、作業にあたってはいろいろと問題点がありました。というのは、登戸研究所に関して共通認識がないということです。そもそも「登戸研究所とは何か」ということについて、詳しい知識がある人はほとんどいませんでした。ですから、展示をするにあたって、何をポイントにしたらよいのかというのは、渡辺賢二先生に教えを乞いながらやっていくということになります。準備室の中でもそうですから、そのほかの教務課とか、施設課とか、他部署の人たちは全然分からないわけです。ましてや乃村工藝社も、登戸研究所については全く予備知識がないということで、ディスカッションをしながら共通認識を作ってやっていきました。しかし、そうはいっても、わからないことがたくさんあるわけです。ですから、調査研究をしながら展示を作成しました。今になってみるといろいろと分かってきたこともありますけれども、当時はまだまだ分からないことがたくさんありました。展示をするというのは具体的に見せないといけないわけです。ですから、言葉で書くことはできても、具体的にどのようなものだったのかというイメージを喚起することが非常に難しいわけです。展示物が文字ばかりになってしまうと訴える力が逆に弱まってしまいますので、ここは非常に苦労しました。また、実物資料の不足というのも大きかったです。やはり資料館の中心になるのは実物資料ということになりますが、実物資料がほとんどありませんでした。現在資料館に行かれますと、例えば濾過筒なども展示されていますが、設立当時はそういったものがまだありませんでした。ですから、多くの資料を、渡辺賢二先生からの寄贈に頼っていました。渡辺先生は、ずっとご自分で、ご自身のお金を使って、たくさんの資料を集めておられました。それを、この資料館ができるにあたって、無償で寄贈していただいて、私たちはそれを活用させていただいています。もしそれがなかったら、本当に物が無い資料館になってしまった可能性があります。

実は学内混乱の後遺症というのが意外にありました。というのは、やはり登戸の保存というようなことをスローガンに掲げていた人たち、非常に急進的な政治セクトの人たちに対する反発も学内にありまして、登戸の保存とか展示とかを言った時に、どうしてもそこと直接結びつけて考えてしまうような方も決して少なくなかったのです。ですから、なかなかギクシャクしてしまうといいでしょうか、要するに「登戸というのは、ああいう運動をやっていた人の名残なんだ」という誤解もあって、それを理解していただくまでに結構時間がかかったと思います。この辺りは、意外に長く尾を引いた問題です。

紆余曲折あったのですが、準備室の皆さんの大変な努力と、寝食を忘れた献身的な働きがあっ

て、2010年3月29日、つまり元々決定した2009年度の最後、ギリギリ年度の内に資料館が開館しました。実は、開館の式典をやっている最中も中は工事をしている状態でした。

この資料館の特徴として、設置された時は博物館の分館ではなくて、教務部管轄機関として開設されたということが挙げられます。明治大学には明治大学博物館という立派な、駿河台にある博物館があります。考古学、刑事、それから商品という、三つの博物館が一緒になって大きな博物館を構成しています。本来ならばその分館的なものとして登戸研究所資料館があってもおかしくはないのですが、設立の経緯が、平和教育のための機関なんだと、もちろん博物館も、いろんな形で歴史教育だとか、そういうところに資するところは大きいのですが、とりわけ平和教育の発信地としてやっていくんだという理念から出発したという関係もあって、教務部が管轄するという大学の組織としてはやや変則的な形になりました。

開館記念式典の時に、当時の納谷学長がこんなことをおっしゃっています。第12図は開館式典の様子ですが、資料館の前に、手前から当時の農学部長、それから学長、理事長、理工学部長、そして一番奥でかまっているのはこの式典の司会の私です。

【資料4】〔本稿 p.50〕は、開館にあたっての納谷学長のスピーチです。前段で、有名なヴァイツゼッカー西ドイツ大統領が1985年に行った演説から「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」という言葉



第12図 明治大学平和教育登戸研究所資料館の開館  
(2010年3月29日 右から田畑農学部長、納谷学長、長堀理事長、三木理工学部長(いずれも当時))

を引用したうえで、このように述べました。「人びとは、ともすると辛い過去（戦争はその最たるものといえましょう）に目を瞑り、忘却しがちです。しかし、人類の過ちを忘却させないためには、日常的に、目に映る形で過去に向き合うことが必要かつ適当であると思います」。ということで、目に見える形、ということが大事な所だと思います。最後の段落「この意味においても、私どもは、生田キャンパスに旧陸軍の登戸研究所があったことに加え、このキャンパスが理系のキャンパスであることをも考え合わせ、この地に登戸研究所資料館を開設し、平和教育を展開する「場」を得た意義は、まことに大きいものと考えております」ということで、ここでも資料館が平和教育を展開する場であると位置付けられているわけでした、まさに教育機関なのである、ということがここで述べられています。

#### 4 登戸研究所資料館の意義

現在でも、明治大学の構内にはいくつも遺跡が残っています。登戸研究所時代の弥心神社、現在の生田神社です。動物慰霊碑。動物慰霊碑の裏面には、はっきりと「陸軍登戸研究所建之」と彫りこんであります。陸軍の星のマークの入った消火栓が2基あります。先程ちょっと見ていただいた弾薬庫と、もう一つ資料館裏手の弾薬庫、倉庫です。研究所本館前に植えられていたヒマラヤ杉、これは日本高等拓植学校時代からのものですが、まさにその長い時代を目撃してきたものとしてこのヒマラヤ杉があるということです。

そして、この資料館です〔第14図〕。当時の面影を可能な限り残しつつ、少し塗り替えたりしたので何か新しい建物のように見えるところもありますが、この建物は明治大学生田キャンパスだけではなく、明治大学の中にある建物の中でも多分一番古い建物です。1940年前後に建てられていると推定されますので、建てられてから80年以上、

経っているということです。ですからこの建物自体が、非常に重要な遺跡であるということです。そういうこともあって、この建物を保存し、且つ活用していくということで、この登戸研究所資料館は成り立っていると言えます。この資料館を始めとして、生田に残っている戦争遺跡は、川崎市地域文化財として認めていただいていますし、かつて文化庁が、2003年だったと思いますが、近代遺跡の調査、特に戦争遺跡の調査を行った時にもその対象になっています。ですから、全国的に見ても非常に貴重な遺跡と言えます。

この登戸研究所資料館、あるいはこの戦争遺跡の保存の意義ということ、最後にまとめておきたいのですが、この資料館自体は旧日本軍の研究施設をそのまま保存活用した資料館とし



第13図 明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡



第14図 36号棟（生物兵器開発）＝登戸研究所資料館  
(2010年3月開館)

て唯一の事例です。旧陸軍の施設を資料館にしたという事例はあるのですが、研究施設をそのまま保存・活用したという点では、多分唯一の事例です。今申しましたように、資料館そのものが非常に重要な戦争遺跡であるということです。

大学キャンパス内の戦争遺跡を保存・活用した数少ない事例。実は大学には、多かれ少なかれどんな大学でも、何らかの形で戦争時代の遺跡というのはあるのですが、戦後取り壊されてしまったり、十分に検証されないままに放置されているという事例が少なくないのです。そういう点では、それをしっかりと遺跡として位置付け、資料館にしたということです。

それから、もっと大きな意義としては、歴史にはほとんど記録されていない秘密戦に焦点を当てた、日本ではほぼ唯一の資料館です。秘密戦というのは、旧陸軍の定義によれば、防諜・諜報・謀略・宣伝ということになり、これは一見すると水面下の出来事ですが、結構戦争の本質を示しているものです。つまり、手段を選ばないという点、平時・戦時の区別はなく、実は平時から戦時の準備がされているということ、それから、軍人・一般人の区別もなく巻き込んでいくということです。ですから、秘密戦というと特殊な分野のように見えるのですが、戦争を考える上では非常に重要なファクターであるということです。

そして、この資料館は登戸研究所の全貌、あるいは各科の活動の概要を実証的かつ視覚的に、学長のスピーチにもあったように、目で見える形で残しているということです。しかし、先程資料館のコンセプトのところでもお話ししましたが、登戸研究所で開発された兵器とか資材というのは、人道的に、あるいは国際法規上、問題があるものも多いです。実際に毒物開発で人体実験が行われたという歴史もあるわけです。それを、高い技術を開発したという観点だけで評価してしまうと、大きなものを忘れてしまうということですね。やはり戦争という大義名分が与えられ、また潤沢な研究資金のもとに研究者がそれに没入していくと、結果的に倫理観や正常な人間性が失われてしまうということの事例でもあるわけです。ですから、これは昔のことだからというだけでは済まされないところがあるということですね。場合によっては、いつ繰り返されておかしくないというものです。特に、この生田は理系のキャンパスですから、やっぱり技術と戦争との関係、技術と倫理の関係ということを、多くの人に考えていただきたいということです。

それから、今日お話ししてきたことでもあるんですけれども、登戸研究所の史実発掘過程を展示しています。一般市民や高校生が、知られざる歴史、戦争の暗部を解明するきっかけを作ったと。戦争の記憶は、その当事者がどんどん減っていくわけです。その記憶はどんどん薄れていってしまうのですが、戦争以後に生まれた新しい人たちが、新しい問いを発することで、戦争体験者もまた違った考え方、気持ちになっていくということです。この登戸研究所資料館は、川崎市の行政と、市民と、それから関係者、登研会と、明治大の連携の結果できたということです。もちろん大学の中の様々な努力もあるんですけれども、それ以前に市民、登研会、こう



いう人たちが遺跡の保存・活用という土台を作ってくださったおかげで、明治大学も、そういう成果に則って資料館を作ることができたということです。ですから設置理念のところでも掲げていますが、平和教育の発信地であると同時に、地域連携の発信地なのだとということで、大学が大学としてだけではなくて、その地域の人たちに支えられたものとして存在するということでもあります。なので、戦争遺跡の保存とか、戦争の記憶の継承などの際にも、常に多くの方々の意見を聞きながら、保存にあたっていくということです。その大切さを、この資料館がどうできてきたかということ振り返る中で、もう一度私たちも再確認したいと思います。

## おわりに

まさに歴史教育・平和教育・科学教育の発信地として、登戸研究所資料館が作られました。とりわけ、目をつむってはいけな戦争の裏側、加害的側面も語り継ぐ。記憶継承の受け皿となっていく。つまり、ありのままに戦争をとらえようとすれば、都合の良いところだけを切り取るのではなく、非常に心の痛むところもきちんと見据えていくということです。それがないと、平和教育ということにはならないのだと思います。

それから、地域住民・教育者との連携を構築する場として、この登戸研究所資料館があるということでした、そういう歴史の中で、この資料館が形成されていったということです。この事実というのは非常に重いものがありますし、私たちもそれを継承していかなければいけないことだと思っております。

それでは、私の話はここまでとさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

## 質疑応答

〔問1〕 コロナで企画展を見る機会がない。オンラインでの解説付きの展示案内ができないか。

〔山田〕 つい最近、解説会をオンラインでも見られるように録画しました。現在 YouTube で配信中ですので、詳細は資料館のホームページをご覧ください。この第11回企画展の内容について、説明をした動画を配信中です。

〔問2〕 登戸研究所の歴史の掘り起こしについて、川崎市教育委員会が大変前向きに協力していたと聞くが、これに対し国や政府からの問い合わせ、あるいは圧力などはあったのか。

〔山田〕 川崎市教育委員会は、平和館などもありますように、歴史の掘り起こしなどに大変熱心なところなのですけれども。特に国とか政府からの問い合わせはないと思いますし、

圧力があつたとも聞きませんが、援助を受けたという話も聞きません。やはり戦争遺跡というのは、まだ国レベルでは認知されていないところもあるのかなと思います。ただこれは時代の<sup>すうせい</sup>趨勢で、戦争がらみの遺跡をどう保存していくかというのは待ったなしの課題ですので、これは地域だけではなくて、本当に国・政府のレベルで進めていただかないといけないところだと思います。

〔問3〕資料館設立のご苦勞に感銘を受けた。設立にあたって妨害や圧力はなかったのか。川崎市の行政が協力的なのは分かったが、政治的な圧力などはなかったのか。

〔山田〕先程の質問とも重なりますが、もし、国立大学だったらなんらかの問題があつたかもしれません。やっぱり私立大学であるという点が、逆に良かったのかもしれません。明治大学は、権利・自由・独立・自治という理念を掲げている大学ですので、そういう点では、なかなか外から言ってくるににくいということもあつたと思いますし、この資料館設立に関しては、やはり大学の当局というか、学長以下そういう信念の下に動きましたので、圧力があつたとしても多分資料館の設立に動いただろうと思います。

〔問4〕資料館の理念に平和教育を加え、歴史教育・科学教育の視点を入れた経緯を教えてください。

〔山田〕平和教育というのは、元々、かなり以前から、戸沢学長時代からいわれていたことです。しかし、平和教育を実現していく上では、歴史教育がきちんとしていないとダメだということで、分離することができないと。平和教育と歴史教育、それから特に、この理系のキャンパスだということもあり、科学がどうあるべきだ、人間に対してどうあるべきだ、という、この観点も必要だということで、どうせ理念として掲げていくのであれば、それは落とせないだろうと。だからこの平和教育と歴史教育、科学教育っていうのは、三位一体であるということが設立過程で合意事項になったということですね。

〔問5〕保存運動は市民・行政・登研会など、学外の活動が大学内に波及したという認識で間違いはないか。

〔山田〕基本的に私はそれで正しいと思います。外側から刺激を受けて、大学の中で「なるほど、そうだ」と、それを受け止めようという機運が出てきたということですよ。もちろん大学の中に個人的には、ずいぶん昔からそういうことに関心を持ったり、考えを持っていた人もいらっしやったとは思いますが、やはり市民や行政や登研会の影響がなければ、なかなか大学としては踏み切れなかったんじゃないかと思います。

〔問6〕元々登戸研究所にいた勤務員や伴さん、それから山本憲蔵さんとはどのようにコンタクトを取ったのか。

〔山田〕実は1980年代に元勤務員の人たちが発言をし始め、そして登研会に集まり始めたというところと、非常に深い接触を持ったのはやはり渡辺賢二先生です。渡辺賢二先生が、

こういう方々と直接コンタクトを持つようになって、それで保存運動でも、そういう人たちの知見というか、経験、言葉、考え方を参考にするようになりました。だから、こうした登研会の人たちと保存運動の架け橋になったのは渡辺先生の功績だと思います。

〔問7〕 現在コロナ禍によるもの以外で、何か課題や問題があれば教えてほしい。

〔山田〕 たくさんあります。資料館は、コロナ禍になって、なんとかオンラインなどで発信をしておりますが、やはり〔実際に〕見ていただかないと分からないという部分もあるんですよね。映像で最大限、なんとかご理解いただけるようにしていますが、現物、展示を目の前にして人が人に伝えるという方法はなんといっても基本でして、それがなかなか、今実現できないということを非常にもどかしく思っています。それから、やはり大学の中にある施設ですから、大学の施設、キャンパスの開発、新しく何かを作るというような時になると、遺跡の保存ということとバッティングしてしまうことも時にはあるわけです。そこをどう調整していくのかというのも、この資料館の大きな課題です。すべてが残せば一番良いわけですが、もしそうでないならば、後世から見て、何が一番良い方法なのかということをいろいろと考えていきたいと思っています。

〔問8〕 海外に同様の謀略兵器の博物館はありますか。

〔山田〕 実は、謀略兵器とかスパイの博物館というのは、ほとんどないんです。個人で、マニアのような人がやっている資料館というのはあるようなんですが。前にちょっとテレビの取材を受けたことがありまして、その時に聞いたことによると、一般の戦争博物館というのは大体どの国でもあつたりするわけです。ところが、秘密戦、となると、どのように、誰をスパイとして派遣した、みたいな話は現在と結びついてしまうおそれがあるので、公にできないようなんですね。ですから、結果として資料館もない。つまり、公共性の強い性格を持ったものとして、秘密戦の資料館っていうのは非常に作りにくいところがある。この点では、登戸研究所資料館は、かなり貴重なものだと考えています。

〔問9〕 私の学校の先輩が登戸研究所で働いていた。渡辺先生にいろいろと証言をしたようだ。

私はその方を知りませんが、その後大阪で会社を興されたようだ。通っていた学校には印刷科・機械科があり、会社の名前が出てそう感じた。

〔山田〕 このように、いろんな方から証言をいただいていて、登戸研究所で働いていた方は戦後、例えば起業して会社をお作りになったとか、戦後もいろんな所で活躍されたという情報もたくさんいただいております。私たちもなるべくそういう情報を集めていきたいと思っていますので、ご存じのことがありましたら是非ご協力をお願いいたします。

〔問10〕 山田愿蔵さんの要望書にあった、歴史の審判を受けるという覚悟に感銘を受けた。開館式、もしくはその後の元所員の人たちの感想などを教えてほしい。

〔山田〕 山田愿蔵さんが、学長宛にお手紙を書いていただいて、それが非常に大きなきっかけ

となって、資料館ができる、というところに進むんですね。私たちも山田愿蔵さんに開館式典にご出席いただきたくて、とにかく開館を急ぎました。そして、2010年の3月29日に開館式典があったのですが、非常に残念なことに一步遅かったんです。山田愿蔵さんはそのちょっと前にお亡くなりになっておりまして、私たちはその開館式典にお招きすることはできませんでした。本当に残念なことです。

それで、ちょうどその開館直後に、私は資料館の中でこういう方に会いました。その方も登戸研究所に勤めていらっしゃった方です。今まで登戸研究所について発言はしたことはないです。ですが、その方は、こういう資料館ができたということは、もう私たちは話しても良いんですね、っておっしゃったんです。ですから、登研会に集まって、登戸研究所についていろいろとお話になる、そういう方もいらっしゃったわけですが、この資料館ができるに至っても、その時代までも、やはり話してはいけないんだと、強く自分を縛ってこられた方はいらっしゃるんですね。それを聞いた時には私もちょっと驚きましたけれども、戦争というのは、ここまで長く人間を縛ってしまうものなのだと、いうことを、本当に実感いたしました。登研会に加わった方の中には、非常に積極的に、次の世代に歴史の真実を伝えなければいけないんだという強い使命感で、私たちの活動にご協力いただいている方もいらっしゃいますけれども、やはり人それぞれ、戦争というものが、その人の人生にいろいろな影響をずっと与え続けたんだなということを、私もこの仕事をしていて実感いたします。

〔問 11〕元々資料館として建てられていない建物を展示施設として、また資料保存の場として利用する際に問題点や考慮された点はあるか。

〔山田〕現在登戸研究所資料館になっている建物というのは、おおむね登戸研究所時代の部屋の中を復元した形になっています。しかし、大きく変わっているところが一カ所あります。元々あの建物にはお手洗がありません。昔のことですから、お手洗いは外にあったんです。しかし資料館にするのに、そのままというわけにはいかないものですから、その部分だけは改造しました。衛生上も、それからずっと学芸員として勤務する人たちもいるわけですから、その部分だけは新しくしました。しかしそれ以外のところはなるべく当時の雰囲気を残すということを第一に考えました。ですが勤務している人たちにとっては、あの建物は非常に住みづらい建物でして、特に冬はとんでもなく寒いんですね。コンクリートが丸々冷えてしまうものですから。今の建物と違って断熱効果とかはあまり考えていない。天井も高いですから、少々空気を暖めてもあまり効果がないんです。そういう点では、かなり職場としては過酷です。一応展示室はエアコンをつけてはいますし、なるべく快適に見ていただけるようにはしてるのですが、元々の建物の構造上、なかなか克服しがたい点もあるということで、今後どうしていくのかという大きな課題の一つ

になっています。

それから、この資料館が現在、多くの方々のご協力の下に成り立っているわけですが、とりわけご尽力いただいているのが「保存の会」の皆さんですね。「保存の会」は、まさに大学関係者よりも古くから、この登戸研究所の保存運動をずっとやっていらっしゃった方の会で、会員もたくさんいらっしゃいます。今でも、そういう保存運動をやってこられた方の経験というのが非常に大事ですし、私たちの、これからの資料館の在り方についてということについても、定期的に懇談会をもってご相談をして、資料館が抱えているいろんな問題点についても、包み隠さずお話をして、それで運営に活かすと。そして展示の改善に少しでも活かしていくという形にしています。ですからこれは大変ありがたいことで、大学の中だけで考えるのではなくて、まさに地域連携の場であるという、この資料館の設立の趣旨からしても、やはり「保存の会」の皆さんとの話し合いの場ないし交流の場というのは、忘れてはいけないと思っています。

〔問 12〕戦時中に登戸研究所が空襲に遭わなかったのですか。

〔山田〕結論からいいますと爆撃は受けてないです。機銃掃射を受けたことはあるそうですが、大規模な爆撃は受けていません。ですから、今日ご覧いただいたように、登戸研究所の建物のほとんどは、戦後もそのまま残っていたんですね。それで、なぜ空襲を受けなかったのかというのは、これは謎といえば謎なんですけれども、敢えてしなかったんじゃないかと思います。これは伴繁雄さんが、戦後米軍に勤めて、そこでいろいろなことを聞いたようなのですが、米軍は登戸研究所の存在はどうもわかっていたようです。いろんな思惑、つまり戦後のことを考えて、人材やデータを確保しようという意図があったものと思われます。爆撃してしまうと、人材もデータも全部ふっとんでしまいますから、敢えてそれをしなかった。川崎は激しく空襲を受けてますから、やり忘れたというような感じではないんですよ。やはりわかっている、敢えてやらなかったのだろうと思います。そういう場所は意外にあるんです。明治大学の駿河台の校舎なんかも、近くにニコライ堂があるということと、大学の中自体に捕虜が働かされているという事情があって、爆撃を受けていないんです。そういうところでも飛び火で焼けてしまうことはあるのですが、ほとんど無差別に行われているように見える空襲も、とりあえずここはやめておこうという場所があるということですね。

〔問 13〕貴重な資料は中学、高校生への教育の機会はあるのか。

〔山田〕今、明治大学の教員・学生以外、入館できない状態ではあるのですが、コロナの状況が改善できましたら、また通常通り、どなたでも見学していただけるということになります。実際コロナ前は、中学・高校の方の見学も多くありましたので、また状況が改善しましたらお知らせします。〔資料館註・2022年9月現在、事前予約制で一般の来館が可。〕

〔問 14〕 長野県の駒ヶ根でも資料館設立の動きがあると聞いている。そちらとの連携・協力は。

〔山田〕 これはもちろん、ずっと連携をしているところです。私が駒ヶ根にお話をしにいったりとか、あるいは駒ヶ根から、こちらに見学に来ていただいたりという関係もあります。今後も、実際に駒ヶ根で市立博物館の中にこの登戸の常設展示を作っていこうという動きが、今強くありますので、連携・協力していきたいと思っています。

〔問 15〕 戦争と科学について焦点を当てていて素晴らしい。資料館設立の推進力になったのは高校生たちの純粋な問いだったのか、あるいは高齢となった元勤務員の、今語っておかなければならないという思いだったのか。

〔山田〕 これは両方です。高校生たちの純粋な問いかけが無ければ、関係者はひょっとしたら、話さなかったのかもしれないです。ここが、やはり戦争体験者だけではなく、戦争非体験者も戦争の記憶の発掘に参加できるということです。若い人が問いかけることで、体験者はそこでまた新しい刺激を受けて、話そうという気になったり、「いや、もっとこのように話さなきゃいけないんだ」と感じたりということがあるのです。だから、戦争非体験者の存在というのは、実は非常に大切であるということがわかります。

〔問 16〕 資料館、あるいは大学で今後の保存運動や研究に対する方針・コンセプトがあるか。大学、地域の教育・研究者との連携について課題はあるか。

〔山田〕 この資料館は、一応、明治大学にある博物館の中の一つであるように見えますが、先ほどもいいましたように、やはり平和教育・歴史教育・科学教育、これらを実現していく場であるという揺るぎないところがありまして、大学自体の考え方をかなり反映しているところがあります。それだけでなく、こういった新しい機関ができることで、大学自体にもいろんな新しい風を吹かせることができと思っています。今後とも、大学が大学としてだけ、その大学だけの考えだけではなくて、やはり地域との連携であるとか、広範な研究者との連携ということを、意識的に図っていく、意識的に戦争の記憶の継承ということをやっていかなければならないと考えています。ですから、皆さんからも、いろいろとご意見をいただきながら、資料館をより良いものにしていこうと思いますので、是非よろしく願いいたします。

いただいたご質問について、一通りお答えをさせていただきました。ありがとうございます。

#### 〔追記〕

本稿は、2021年5月15日（土）にオンラインで開催された第11回企画展記念講演会②「資料館開館に向けての大学の取り組み」の書き起こしに加筆・修正したものです。

## 資料館開館にむけての明治大学の取り組み

明治大学平和教育登戸研究所資料館長 山田 朗

### はじめに

- 〔1〕 明治大学平和教育登戸研究所資料館の開館（2010年3月29日）  
→ 開館に至る大学内での混乱と議論
- 〔2〕 行政・市民・遺跡所有者＋遺跡関係者（登研会）が連携した戦争遺跡保存活用の模索

### 1 明治大学による用地・建物の取得

- 〔1〕 慶應義塾大学・北里研究所・巴川製紙などが利用（敗戦～1950年）
- 〔2〕 明治大学による跡地の取得  
建物89棟、土地31,218坪を977万円（1949年の申請時の価格）で取得  
→ 1950年生田キャンパス開設、1951年度より農学部が使用
- 〔3〕 キャンパス整備のため建物の取り壊し、改築（1970年代以降）  
→ 1990年、旧登戸研究所本部本館の取り壊し発表を契機に市民による保存運動  
→ 1990年代半ばには木造建物2棟（5号棟・26号棟）・鉄筋建物2棟（36号棟・44号棟）と弥心神社・動物慰霊碑・消火栓（2ヶ所）・「弾薬庫」（2ヶ所）だけに。

### 2 登戸研究所に関する調査・研究

- 〔1〕 ジャーナリストによる調査：斎藤充功・鈴木俊平ら
- 〔2〕 旧軍人（伴繁雄・山本憲蔵ら）による回想・証言（1980年～）。
- 〔3〕 元所員による「登研会」の結成（1982年）。
- 〔4〕 市民・高校教員（渡辺賢二・木下健蔵ら）・学生と「登研会」の連携  
1989年：『雑書綴』の発見、高校生たちが元所員の証言を掘り起こす。  
1990年：川崎で「旧陸軍登戸研究所の建物を保存する市民の会」を結成。
- 〔5〕 市民と大学関係者の連携  
1994年：明治大学、旧登戸研究所26号棟の取り壊しを決定。  
→ 明大生・教職員、「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成。  
共同代表に海野福寿文学部教授・森恒夫経営学部教授らが就任。  
1995年：明治大学内における調査・研究の始まり  
→ 大学（人文科学研究所）の研究費を使った海野教授らのチームによる調査・研究  
「旧陸軍登戸研究所の総合的研究：十五年戦争におけるその意義」→【資料1】

### 3 明治大学における登戸研究所保存・活用の取り組み

- 〔1〕 明治大学による保存・活用方針の決定  
1998年：戸沢充則学長（1996-1999）、登戸研究所跡地の保存・活用方針打ち出す。  
学長室「旧登戸研究所の保存・活用について」（1998年2月14日）  
記念碑を設置した小広場、生田内施設に資料室を設置（26号棟は解体）  
1999年：「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」設置（委員長：津坂伸幸農学部長）  
→ 44号棟取り壊しに伴う残存建物の保存・活用を検討  
「平和資料館」（平和教育の場）として5号棟あるいは36号棟を活用すべき。  
明治大学創立120周年にあたる2001年に展示施設、モニュメント設立を決定。  
争点：「平和資料館」とするのは5号棟か36号棟か、両方か。



明治大学平和教育登戸研究所資料館 第11回企画展 記念講演会②〔2〕

〔2〕 保存・活用方針の一時凍結

2000年：学生自治会・生協と大学との対立激化

- 大学祭中止、学生部長襲撃事件の勃発
- 山田雄一学長、「学内正常化」の達成を優先し、登戸保存活動を凍結。
- 「保存を求める会」の生田生協が中心となり、5号棟内に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置、元勤務員を講師に迎えた講演会等を開催。

〔3〕 保存・活用方針の復活と「展示資料館」開設の動き

2004年：納谷廣美学長、登戸研究所跡地の保存活用方針を表明。

2005年：登研会会長山田愿蔵氏からの学長宛に「施設保存・資料館開設」を求める手紙 → 【資料2】

- 事前に登研会事務局長・渡辺賢二・海野福寿・森恒夫各氏が懇談関係者の高齢化などにより保存・活用の具体化を急ぐ必要性を確認

2006年：「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）の設置に関する検討委員会」（委員長：坂本恒夫教務部長）設置される。

- 「展示資料館」は教育施設という位置づけで、教務部長の管轄に。
- 「展示資料館」は2009年までに設置することを決定。
- 争点：明治大学が設置することの是非、設置の理念、資料館の「需要」の有無

2007年3月：「検討委員会」のもとに「登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）展示専門委員会」（委員長：山田朗文学部教授）設置。

6月：「展示専門委員会」中間報告、資料館の基本コンセプトを示す。

① 36号棟を展示資料館として保存し、登戸研究所の全貌を伝える歴史教育・平和教育・科学教育にふさわしい施設とすること。

② 登戸研究所に関する資料・文献・証言を収集すること。

③ 平和教育の発信地として、明治大学における研究・教育に役立てるとともに一般に公開すること

同月、「展示専門委員会」は生田キャンパスで現地見学会と講演会、展示資料館説明会を開催。

2008年：納谷学長、「登戸研究所問題の解決」を選挙公約として再選。

- 「登戸研究所展示資料館（仮称）」を生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である36号棟を改装して開館することを正式決定。

- 6月、展示資料館（仮称）設立の学内調整ワーキンググループを設置。

教務事務室・施設課・博物館・設置準備室（予定）で構成。

- 7月、登戸研究所明治大学展示資料館（仮称）設置準備室を駿河台研究棟に設置36号棟改装：施設課、展示企画：準備室、展示施工：乃村工藝社 → 【資料3】

- 作業にあたっての問題点：

登戸研究所に関する共通認識の欠如、調査・研究をしながらの展示作成  
学内混乱の後遺症

実物資料の不足（多くの資料を渡辺賢二氏からの寄贈に頼る）

2010年3月29日：明治大学平和教育登戸研究所資料館開館（4月7日～一般公開）  
博物館の分館ではなく、教務部管轄機関として開設

- 開館記念式典における納谷学長のスピーチ → 【資料4】

4 登戸研究所資料館の意義

- 〔1〕 旧日本軍の研究施設をそのまま保存・活用して資料館にした唯一の事例
  - 資料館（登戸研究所第二科第6班研究棟）そのものが重要な戦争遺跡
  - 大学キャンパス内の戦争遺跡を保存・活用した数少ない事例
- 〔2〕 歴史にはほとんど記録されていない〈秘密戦〉に焦点をあてた、日本ではほぼ唯一の資料館
  - 〈秘密戦〉（防諜・諜報・謀略・宣伝）は、戦争の本質を示すもの。
  - 手段を選ばず、戦時・平時の区別なく、軍人・一般人の区別なし。
- 〔3〕 登戸研究所の全貌、各科の活動の概要を、実証的かつ視覚的に表現
  - 登戸研究所で開発された兵器・資材には、人道上・国際法規上問題のあるものも多い。
  - 戦争という大義名分と研究への没入により、倫理観・人間性を次第に喪失していく。
- 〔4〕 登戸研究所の史実発掘過程をも展示
  - 一般市民・高校生が知られざる歴史、戦争の暗部を解明するきっかけをつくった。
  - 市民・登研会・行政・遺跡所有者（明治大学）の連携の成果
  - 平和教育・地域連携の発信地として明治大学も開設を決定

#### おわりに

- 〔1〕 歴史教育・平和教育・科学教育の発信地としての登戸研究所資料館
  - とりわけ、戦争の裏面（加害的側面）を語り継ぐ場（記憶継承の受け皿）としての意義
- 〔2〕 地域住民・教育者との連携を構築する場としての登戸研究所資料館

#### 【参考文献】登戸研究所保存運動に関する著作

- 〔1〕 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた 謀略秘密基地 登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会、1989年）
- 〔2〕 長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会、1991年）
- 〔3〕 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）
- 〔4〕 海野福寿・渡辺賢二ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003年）
- 〔5〕 姫田光義監修・旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会編『学び・調べ・考えようフィールドワーク 陸軍登戸研究所』（平和文化、2009年）
- 〔6〕 明治大学史資料センター編『明治大学小史』（学文社、2010年）
- 〔7〕 駿台史学会編『駿台史学』第141号（2011年3月）「特集：戦争遺跡の検証と保存―登戸研究所資料館の開館によせて」
- 〔8〕 山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011年）
- 〔9〕 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦―科学者たちの戦争―』（吉川弘文館、2012年）
- 〔10〕 明治大学平和教育登戸研究所資料館・山田朗編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）
- 〔11〕 木下健蔵『日本の謀略機関 陸軍登戸研究所』（文芸社、2016年）
- 〔12〕 明治大学平和教育登戸研究所資料館編刊『明治大学平和教育登戸研究所資料館 開館10周年記念誌 10年のあゆみ』（2020年3月）

**【資料1】人文科学研究所総合研究「旧陸軍登戸研究所の総合的研究—十五年戦争におけるその意義」の主な研究成果**

- 〔1〕 写真家・吉田一法氏に依頼し、生田キャンパス、疎開先である長野県・福井県・兵庫県、人体実験を行った南京病院、阪田機関本部(上海)を取材およびスライド記録を作成。
- 〔2〕 元所員の証言を基に第三科疎開先である福井県武生および栗田部を調査。登戸研究所「北陸分廠」として接收した加藤製紙・西野製紙を調査し、疎開先での第三科の活動を明らかにした。
- 〔3〕 疎開先である兵庫県小川村を調査。「関西分廠」の活動を明らかにした。
- 〔4〕 元所員の証言を基に、静岡大学工学部(浜松市)に終戦直後登戸研究所から寄贈された「登戸研究所」蔵書印がある書籍約1,000冊を発見。
- 〔5〕 『雑書綴』復刻。(第三展示室に展示中)
- 〔6〕 研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』(青木書店、2003年)刊行、A4判267頁。

出典：第11回企画展展示パネル第4章・表2より作成。

**【資料2】登戸研究所跡の保存・資料館設置の要望書**

明治大学学長 納谷廣美 殿

〔前略〕

戦後六〇年たった今日、あの戦争の風化現象が進んでいます。私たちが行っていた研究や製造した兵器について何一つ明らかにされないまま埋もれようとしています。私たちの歴史そのものが消し去られようとしています。

私たちは、例えば、当時は秘密の研究所であっても事実は事実として残し、歴史の審判を受けるべきだと考えています。そこで、以下の点をご要請します。

記

- 1、陸軍登戸研究所当時の戦跡をできるだけ保存していただきたい。
- 2、陸軍登戸研究所当時の資料を展示・公開することができる資料館をつくっていただきたい。なお、この点に関しては私たちは当時の資料の提供など、ご協力いたします。

平成一七〔2005〕年一〇月三〇日

登研会代表 山田愿蔵

出典：明治大学平和教育登戸研究所資料館・山田朗編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』(明治大学出版会、2012年)230頁。

**【資料3】展示資料館(仮称)設置準備室の陣容**

準備室長： 山田 朗

展示総監督：渡辺賢二講師

展示総監督補佐：齋藤一晴講師

準備室学芸員：吉田桃子・石橋星志(DC)→森麻弥・橋本朋子

展示制作担当責任者

レストスペース(時代背景)：森麻弥学芸員

第一展示室(登研全容)：山本智之講師

第二展示室(第一科)：小山亮(DC)

第三展示室(第二科)：吉葉愛(MC)

第四展示室(第三科)：酒井晃(DC)

第五展示室(大戦末期・戦後)：本庄十喜(DC)

明治大学平和教育登戸研究所資料館 第11回企画展 記念講演会②〔5〕

その他：山口隆行（MC）・花岡敬太郎（MC）・阿部靖子（MC）・大堀宙（MC）  
展示施工：（株）乃村工藝社  
出典：駿台史学会編『駿台史学』第141号（2011年3月）「特集：戦争遺跡の検証と保存—登戸研究所資料館の開館によせて」より作成。DCは大学院博士後期課程の大学院生、MCは大学院博士前期課程（修士課程）の大学院生。

【資料4】明治大学平和教育登戸研究所資料館開館にあたって（2010年3月29日）

開館式典において納谷学長は、1985年におこなわれたヴァイツゼッカー西ドイツ大統領（当時）の演説から「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」という言葉を引用したうえで、次のように述べた。

人びとは、ともすると辛い過去（戦争はその最たるものといえましょう）に目を瞑り、忘却しがちです。しかし、人類の過ちを忘却させないためには、日常的に、目に映る形で過去に向き合うことが必要かつ適当であると思います。〔中略〕

アインシュタイン、湯川秀樹、朝永振一郎などの著名な物理学者が、晩年に原水爆禁止を訴える運動に参加したことからも明らかなおと、自らの発明・発見（研究成果）がその利用如何によっては世界平和を脅かすことにもなる現実に対する反省、悔悟に基づく行動でもあったことを想起すべきです。

この意味においても、私どもは、生田キャンパスに旧陸軍の登戸研究所があったことに加え、このキャンパスが理系のキャンパスであることをも考え合わせ、この地に登戸研究所資料館を開設し、平和教育を展開する「場」を得た意義は、まことに大きいものと考えております。

出典：納谷廣美「開館記念式典のご挨拶」、『季刊・明治』第47号（2010年7月15日）6～7頁。

【年表】登戸研究所保存運動と明治大学

- |            |                                                                                                                                                              |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1990年      | 明治大学、旧登戸研究所本部本館の建物の取り壊しを決定。<br>川崎で「旧陸軍登戸研究所の建物を保存する市民の会」発足。                                                                                                  |
| 12月14日     | 「市民の会」、保存を求める署名3,339筆を川崎市議会に提出。                                                                                                                              |
| 1991年      | 川崎市、本館建物の記録保存を決定。                                                                                                                                            |
| 6月         | 「市民の会」、本館建物の移築保存を求める請願書を提出。                                                                                                                                  |
| 1994年      | 明治大学、旧登戸研究所26号棟の取り壊しを決定。<br>明治大学学生・教職員、「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」を結成。<br>「保存を求める会」共同代表の海野福寿文学部教授・森恒夫経営学部教授らが、明治大学人文科学研究所に申請した登戸研究所に関する総合研究（1995～1997年度）が採択される。 |
| 1995年      | 文化財保護基準の改正<br>明治大学、26号棟の取り壊しの3年間凍結を決定。                                                                                                                       |
| 1998年2月14日 | 戸沢充則学長（1996-1999）、登戸研究所跡地の保存活用方針を打ち出す。                                                                                                                       |
| 1998年      | 文化庁、「近代遺跡調査」開始、登戸研究所も調査対象に。                                                                                                                                  |
| 1999年4月28日 | 明治大学、「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」（委員長：津坂伸幸農学部長）を設置。                                                                                                             |

明治大学平和教育登戸研究所資料館 第11回企画展 記念講演会②〔6〕

- 9月 「登研会」、戸沢学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」を提出準備(提出できず)
- 2000年10月 明治大学、特定セクトの内部対立にともなう学内の混乱に対処するため駿台祭・和泉祭・生田祭の中止を決定。
- 11月 2日 長尾史郎学生部長襲撃事件
- 12月 12日 「学内正常化」のための明大教職員による全学集会  
山田雄一学長(2000-2003)、「学内正常化」を優先するために、登戸研究所保存・活用の動きを凍結。  
「保存を求める会」、5号棟内に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置、元勤務員を講師に迎えた講演会等を開催。
- 2003年3月 19日 1995-97年の共同研究の成果として海野福寿・山田朗・渡辺賢二編『陸軍登戸研究所：隠蔽された謀略秘密兵器開発』(青木書店)が刊行される。
- 12月 8日 文化庁による「近代遺跡(軍事に関する遺跡)」として生田キャンパスを詳細調査
- 2004年 納谷廣美学長(2004-2011)、登戸研究所跡地の保存活用方針を表明。
- 2005年10月 30日 登研会山田愿蔵代表、学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」を提出。
- 2006年7月 明治大学、「登戸研究所明治大学展示資料館(仮称)」の設置に関する検討委員会(委員長：坂本恒夫教務部長)を設置。  
「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」発足。
- 2007年3月 「検討委員会」のもとに「登戸研究所明治大学展示資料館(仮称)展示専門委員会」(委員長：山田朗文学部教授)設置。
- 6月 「展示専門委員会」中間報告、資料館の基本コンセプトを示す。  
「展示専門委員会」、生田キャンパスで現地見学会と講演会、展示資料館説明会を開催。
- 12月 納谷学長、「登戸研究所問題の解決」を選挙公約として再選。
- 2008年 「登戸研究所展示資料館(仮称)」を生田キャンパス内の旧登戸研究所施設である36号棟を改装して開館することを正式決定。
- 6月 展示資料館(仮称)設立の学内調整ワーキンググループ設置される(教務事務室・施設課・博物館・設置準備室で構成)。
- 7月 登戸研究所明治大学展示資料館(仮称)設置準備室を駿河台研究棟内に設置(展示施工：乃村工芸社)。
- 2009年 26号棟取り壊し、部材を部分保存。
- 2010年3月 29日 明治大学平和教育登研研究所資料館開館(4月7日～一般公開)